
ある花嫁の告白

ゆいまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある花嫁の告白

【Nコード】

N4688G

【作者名】

ゆいまる

【あらすじ】

結婚式の当日、新郎の東吾が目にしたのはナイフを手にした花嫁と、その足元の血だまりに横たわる死体だった。花嫁は神聖な神の前で告白をする。「私、父を殺したの」と。

告白 1

人生には二つの悲劇がある。

一つは願望が達成されないこと、他の一つは、それが達成されることである。

バーナード・ショー 「人と超人」

-

「私、父を殺したの」

そういつて呆然と立ち尽くす新郎、相田東吾に振り返ったのは、花嫁姿の雪子、その人だった。

父を殺した

そんな不穏な内容を告白するその声には、まるで、この教会内に降り注ぐステンドグラスを通した、色鮮やかで柔らかい光のような体温があり、東吾は一瞬間き違えたのかとさえ思った。

しかし、アンバランスさは残念ながら、声とその内容だけには留まらない。

東吾は自分の目に映るもの、一つ一つを確認するように見て回った。

柔らかな朝日が舞い込む静謐な教会。左右に数列ずつ置かれた机付きの長いすの間に、東吾は立っていた。

目の前には、大きな十字架が見事なステンドグラスを背負い聳え立っている。その下で、雪子はその手に、まるでリングでも剥くようなさりげなさでナイフを持って立っていた。足元に死体らしき塊を従えて。

十字架、花嫁、ナイフ、死体らしき塊。

眼前に飛び込んできた、アンバランスな組み合わせに整合性が見当たらず、目眩すら覚える。

『死体らしき塊』というのはまだ東吾自身、それが生命活動を停止した体だと認識していないからだ。正確にはそう認識したくないから、なのだが、とにかく、簡単にそれが『死体』と決めつけるわけにはいかなかった。

なにせ、ここは教会。しかも、一時間後には自分と雪子の結婚式が行われる場所なのだから。

「雪子、何の冗談だよ」

無理やり喉から絞り出した声は、案外頼もしいほどに安定した音だった。少し我を取り戻したような気になった東吾は、僅かな余裕の欠片をかき集め、冗談である証拠を探ってやろうと雪子の足元にさらに目を凝らす。

未だに動かぬその塊は、彼女の一回りは大きな男の体躯だった。黒い鉄の匂いのする水溜りに浮かんでいるように見える。

うつぶせに倒れているせいか、窮屈そうな黒服を着ているその男の顔は、ここからはえなかったが、後ろに撫でつけられているグレイの頭髮の横についた特徴的な耳は、よく見て取れた。

横に突き出たその形に、二人で少々意地の悪い笑みをこぼしたのを覚えている。

なんだ、そう言うことか。やっぱり冗談じゃないか、と東吾は胸を撫でおろした。

やっぱり、彼女の父親の死体なんかじゃない。これは冗談なのだ。確信し、肩の力を抜くように溜息をついた。雪子は心配げに東吾を見上げ、うわ言のように唇の隙間から声を零す。

「東吾さん。私……」

「もういいよ。こんな冗談、笑えないし。残念だけどこんなのいい演出だとは思えない」

「違うの。本当に……」

結婚式にサプライズとはよくある話だが、こんなのはさすがにいけない気がした。

こんな事で、大切な雪子を責めたり、なじったりつもりはないが、この冗談の趣味の悪さはちょっと度が過ぎている。

もしかしたら悪友達の差し金なのかもしれない。東吾はそう思いなおした。

彼らとは、子どもの頃ずいぶん一緒に馬鹿もしたし悪さもした。

雪子に言えないような少々法律に触れるような『やんちゃ』もだ。

アイツらは悪乗りすると、押しも強い。真面目で大人しい雪子なら、したがってしまふというのは、雪子が一人で仕組んだと言うう仮定よりよっぽど説得力がある気がした。

東吾は出来るだけ不機嫌さを隠すように穏やかに、諭すように問いかける。

「雪子。どういふつもり？それとも、皆で俺を驚かそうとか、そう言う事？せつかくのサプライズ、悪いんだけど、こんなの不謹慎だし感心できないよ」

しかし、雪子はその問いに答える事はなかった。しばらく、戸惑ったような顔で倒れている男の背中を見つめてから、まるで独り言のように呟く。

「本当なの。信じて」

「もう、いいから」

呆れる東吾。だが、雪子は引かない。

「お願い、話を聞いて。私は本当に父を……」

「しつこいよ！」

思わず声を荒げてしまい、東吾はしまったと舌打ちした。

雪子はそのな彼に困ったような顔を見ると、ナイフを持った手をだらりとたらしした。涙をこらえているのか、それとも酷く怯えているのか、東吾には判然としなかったが、彼女の唇は震えていた。

「なあ、もう、いいだろ？」

弁解がましく優しい声で雪子に、半ば頼みこむように状況の撤回

を求める。しかし、やはりどれだけ待っても、震える唇からは暴露も弁解も聞こえてこなかった。時間だけが過ぎていく。二人の間に横たわる、未だに動こうとしない偽の父親の死体が一層苛立ちを増幅させ、東吾は腕にはめた時計に目をやると溜息をついた。

式まで、あと40分。こんな手の込んだ悪戯の後処理を考えれば、残された時間に余裕があるとは思えない。

「なあ、何がしたいの？父親を殺した？そんなわけないでしょ。だって、ここに転がっている……」

死体は、と言いかけて口を嚙む。この晴れの日にあまりにも不謹慎な言葉のような気がしたからだ。

東吾は咳払いすると、その死体役の人物を睨みつけた。特徴的な耳。間違いようがない。

東吾は足早にその偽死体に歩み寄ると、手を伸ばした。

ひつと雪子が息をのむ。

しかし、彼は構わずうつ伏せその体を床から剥がすように肩を掴んだ。

「もう、いい加減起きてくださいよ！あんたもちょっとおかしいんじゃないか？こんな冗談に加担するなんて。あんた、曲がりなりにも……」

思いつきり腕を引いた。体がごろんと傾き、天井を仰ぐその顔に、東吾は怒鳴る。

「この教会の神父だろ！」

言って、手を放した。

この耳は、この教会の神父、その人のものに間違いなかった。忘れもしない。二人で挙式用の教会に、ここを訪れた時のことだ。

教会の代表として出て来た彼の、前を向いた耳がどうにもこうにも気になって、挙式の仮契約を済ませて帰るその時に、二人で顔を見合せて笑ってしまったのだ。「まるで、七人の小人の耳のようだと。」

打ち合わせの時の感触で、気さくでノリがいいのはわかっていたが、こんな事にまで付き合うなんて……。

東吾は半ば軽蔑しその顔を覗き込んだ。

神父の体は力なく、血だまりに転がり、鉄錆びた匂いの液体がびちやりと跳ねた。

血液と思われるそれにまみれた顔は、目を見開いたまま、微動だにしない。焦点のあわないそれはどろんと濁っていて、おおよそそれは……演技には……。

「嘘、だろ」

東吾は一歩足を引きずるように後ずさった。

明らかだった。

これは、死体らしき塊じゃない。死体だ。

それを認識し、悲鳴が喉まで出かったとき、雪子にぶつかった。

「ゆ、雪子」

「だから、話を聞いてって言ったのに」

雪子は寂しそうにほほ笑むと、死体を見下ろした。

その横顔は、やはり美しく、人を殺したばかりのものとは思えないほどの冷静さを湛えていた。敢えて何か感情をそこから探るなら、何かを遠くから見守るような愛情だった。

花嫁、死体、愛情

やはり整合性に欠ける組み合わせに、東吾の頭は混乱する。

そして、今ある知識と理性を総動員させて、雪子のその目に問いかけた。それでもしなければ、それこそ悲鳴をあげてしまいそうな気がしたからだ。

「僕は、君の父親が神父なんて聞いてないぞ。君の父親は幼いころに亡くなったんじゃないか？」

雪子は東吾のその言葉を聞くと、ふっと、その目に哀しみの色を

灯した。

そして力なく崩れるように傍にあつた長椅子の端に座り込むと、無造作にナイフを握つたままの手を投げ出した。

「そうよ。この人は父じゃないわ」

「は？だって、君は今、父を殺したと……あ」

東吾は息をのみ、雪子を見つめる。

雪子は彼の察しが正しい事を示すように顎を引いた。そして、口元に笑みを浮かべると、乞うように東吾を見上げ、

「話を……聞いてくれる？」

質問の形の懇願をした。

告白 2

雪子は一息をつくと、死体の方にはあまり気にした様子は見せず、まるで祈りでもささげるかのように十字架を見上げた。

黒く豊かな髪は結びあげられ、そこに止まる薄紅色の花は蝶がそこに止まっているかのようにも見える。清楚さを伺わせるうなじからの色香を、白い純白のベールが覆い、聖母すら連想させた。

雪子と言えば、まさに雪のような白い滑らかな肌と、口元にあるホクロが一番のチャームポイントなのだが、今やその肌は少し青白さすらうかがえ、口元は軽く結ばれていた。

東吾は足もとの死体をどうしていいかわからず、視界に入れないようにその塊を挟む形で、雪子の座っている席と対になる長椅子の端に座った。

落ち着いて話を聞く場合じゃないのはよく良くわかつている。

なんなら、この神父の生存をきちんと確認し、警察を呼ぶなり人を呼ぶなりしないといけないはずだ。しかし、上を向いたままの神父の目は、確認はもう無意味な事だと告げていたし、不思議と騒ぎ立てるような雰囲気じゃなかった。

「東吾さん。私ね、今日、この日の為に貴方にであつたのよ」

足元に死体さえなければ、この台詞は感動的なものだっただろうに。東吾はそんな事を想いながら、反応に困り、ただ頷いた。

雪子はそんな東吾に、黒目がちの目を細め嬉しそうな吐息を漏らした。

「東吾さん。東吾さんは私の事、どこまで知っていたかしら？」

「どこまでって……」

結婚相手の事だ。これからの一生をと共に過ごそうという相手の事を、何も知らないはずはない。少なくとも、この死体を見るまではそう思っていた。

東吾は居心地の悪さに、せわしなく視線を彷徨わすと彼女の手の

中のナイフに目をやり、そこに話しかけるように口を開いた。

「すべてだと、思ってたよ」

名前、経歴、趣味に友人関係。彼女の家族とも付き合いはある。

東吾は彼女のその親族の顔を思い出した。

料理教室を開く、やり手の母親。シングルマザーの姉。まだ高校生。の妹。女ばかりの家族で、いつも賑やかで明るい人たちだった。

東吾が結婚の挨拶に訪れた時は、「やっぱり家に男の人がいた方が心強くていいわね」と歓迎され、気分が良かったのを覚えている。他の家族も、雪子に負けないくらいの美人なのが、その時の気分をさらに良くしていたかもしれない。

雪子に関しては、もちろん他の事だってよく知っている。

彼女との出会いは、彼女が派遣社員で東吾の会社に来たのがきっかけだった。

すらりとしたスタイルに、控え目な態度と品のよい物腰、気の利く優しさ。麗しき日本美人、そんなフリースがピッタリな彼女を狙う連中は、それこそ山ほどいた。

烏合の衆から抜きんでようと、東吾はそれまでだらしなかった女性関係をかなぐり捨ててまで、彼女に必死になり、ようやく射止めたのだ。

雪子は、それまで人を人とも思わずにいい加減に生きて来た東吾の、ようやく手に入れた本物の愛、そのはずだった。

雪子は東吾の言葉にゆるりと首を横にふると、ベールを脱いだ。

それをナイフの上にかぶせるように置き、申し訳なさそうに眉を寄せる。

「東吾さん、東吾さんは何にも知らないわ」

「どうということ？」

まるで内緒話をするように声を落とす。雪子は小首を傾げると、ため息交じりに答えた。

「東吾さん、今までの事、全て忘れて。私の名前も、経歴も、家族も」

「わからないよ。何を言っているか！」

「耳を塞がないで聞いて。目をそらさないで見て。今日までの私は、みんな嘘なの」

「じゃあ、何だっというんだよ」

東吾が怒り交じりの声を上げる。

全てが嘘？ 馬鹿げているにもほどがある。

雪子は何かのトラブルで神父を殺してしまし、混乱しているのだ。そうに違いない。二人が過ごしてきた時間、自分が知っている彼女、全てが嘘なんて、あるはずがない。

東吾はまるで救いを求めるように、雪子のその陶器のような横顔を見つめた。しかし、雪子はそれには一瞥もくれず、再び十字架を振り仰ぐ。

東吾もつられて、十字架を見上げた。

天から降りそそぐ陽に浮かびあがるそれは、罪を見下ろし、なお、肅然と佇んでいる。

雪子はそのに神聖な何かを見極めんとするかのように、じっとそれを見つめると、ぽつり、呟いた。

「私、殺し屋なのよ」
と。

告白 3

雪子は少し体を前に傾けると、ナイフを膝の上に置き両手を組んで頂垂れた。

それは神に誓いをたてる花嫁の姿、そのものだったが、靴から零れたのは過去との邂逅だ。

「この話はね、私の父と母の話から始めないといけないの」

雪子は瞳を伏せ、そっと、愛おしいものに触れるような優しい指先でナイフの柄を撫でた。

「私の父にはね、国籍がなかったの。国籍どころか、名前も、過去も、何もかも」

「どういう事？」

「今はもう、存在しない国の、諜報部員だったのよ」

諜報部員……東吾は再び架空の世界、いくら身近でもテレビのドキュメント報道でしか聞いた事のないような単語に、また閉口した。しかし、依然と雪子の表情は真剣そのものだ。

今更、こんな事をいちいち問いただすのも返って場違いな気がして、東吾はただ先を促すようにうなずいた。

「父の国が消滅したのは、父がこの国、日本に潜入中の事だった。その国に父が何を残し、何のためにそういう生き方を選択したのか、もしくは選択させられたのか、私は知らない。でも、確かなのは、父は全てをその瞬間に失ったって事なの。東吾さん、そんな人間がどうやって生きていけばいいか、想像がつく？」

正直、もう、この時点で東吾の中ではこの話に現実感と言うものが欠落して聞こえていたので、首を捻った。

ちよっと前に見た、トム・ハンクスのターミナルを思い出す。主人公は諜報部員でこそなかったが、空港を出る前に自国が消滅してしまい、その居場所が定まるまで何年間か空港に閉じ込められる羽目になる話じゃなかったか。

「わからないよ。でも、日本からは出られない、もしくは出ないだろうね」

偽造パスポートくらいは諜報部員なら持っていたかもしれないが、帰る場所がない。なら、やはり、危険を冒してまで出国はしないんじゃないだろうか？自国に同盟国がありそちらに逃亡するとしても、陸伝いに他の国があるならともかく、この島国から出るのは骨な様な気がした。

「そうね。父は、この日本で生きていく事にしたの。諜報活動中に気付いた人間関係も居場所も一応はある。状況を伺いながら、日本人として生きていく事にした。自国を滅ぼした国に加担した、この国を恨みながらね」

雪子はそこで視線を一層おとした。

その瞳には黒くどろりと闇と悲しみが溶けあうような悲嘆が浮かび、この荒唐無稽な話の中で一番の説得力を添える。

もしかしたら、雪子自身も、この国を深く恨んでいるのではないか、そんな懸念さえ感じさせる色だった。

「そして、父は母に出会ったの。父はね、母との話をする時だけ、凄く幸せそうな顔をしたわ。きっと、父の人生で一番幸せだった時間なのね」

そういうと、密やかな溜息をつき、そっとナイフの方に目をやった。東吾にはそのナイフを見つめる雪子の気持ちが、まだ分らなかった。

告白 4

雪子の父親の名は「そうね、ここでは俊とさせてもらうわね」と断り、母の名前は「私も知らないの」と恥いるように付け加えた。

日本名、林俊はその時、IT関連の企業に勤めていたらしい。政府関係の仕事も請け負う結構大きな企業だそうだから、半民半官な天下り企業だったのかもしれない。

どうやってそんな所に潜り込めたのか、雪子は詳しい事は知らされてはいないが、母親となる女性出会ったのは、その職場だったそうだ。

俊は、当時システムエンジニアで重要なポストに就いていた彼女から情報を引き出す為、少なくともそういった場所に近づくために恋人関係にこぎつけていた。

国が消滅し、数週間経ったある夜の事だった。

俊はどれだけ手を尽くしても、どうにもならない状況にようやく絶望し、浴びるほど酒を飲んで、バーで潰れてしまった。

女は忙しい中、俊を迎えに来、優しく介抱しながら「仕事の失敗は誰にでもあるわ」と見当違いの慰めの言葉をくれ、彼女の部屋に泊めてくれた。

俊は、そんな心から自分を信じ、隣で安らかに眠るその寝顔を見つめながら考えていた。

数年、日本に住んでいても、好きになれなかったこの国とこの国の人間の事を。

この国は俊からみれば、嫌悪を通り越し、薄気味悪さすら覚える国だった。

入国して、すぐに驚いたのは、この国の人間の政治への無関心さ

だ。新聞をめくったり、酒場に行けばそれなりの政治批判も聞こえてくる。でも、この国民は「困った」「腹が立つ」と口々に言う割には、誰一人として行動しようとはしない。それどころか、選挙権すら行使しない輩がほとんどだった。

自分の国では、数年前、選挙権を求めた闘争が起こり、多くの命を失ったというのに……。

また、理解できないのが、幼児のような振る舞い、嗜好の成人が多い事だ。大人になっても、子どものような話し方や考え、果ては「大人に何かなりたくない」と現実から逃げる人間すらいるらしい。現実逃避はまだ理解できる。

俊の国でも、現実を憂い、麻薬や酒に命を削る人間はたくさんいた。しかし、日本との違いは、そうやっていれば必ずその先に死がある事だ。

なのに、何だ、この国は。

そうやっていても、そういった人間のほとんどが飢えはしないし、もちろん死にもしない。逆に、この国を築いてきた老人、未来を担う子供には極端に冷淡だ。

大切にされるべき存在が無視され、命を落とす。

税金を払っても保障されない医療と生活、歴史と未来に敬意を払わない風潮。

また、自分を産んだ親にも、物を教えてくれる教師にも敬意を払いもしない。いい所、友達扱い、軽蔑すらする場合もある。

感謝を忘れ

生き方を忘れ

モノだけが飽和した

絶望しか見いだせない国

「頭がおかしくなりそうだ。ここはネバーランドなのか」

俊はよく酔っては、女にそう訊いたものだった。

その度に女は「俊にもそんな子供っぽいところがあったんだ」と笑った。

告白 5

俊は数時間前に見た、その笑顔を頭の端に止めながら、テレビに目を向けた。自国の崩壊の報道以降、仲間とは音信不通状態だ。情報、今やこんな偏見だらけの意図をたっぷり含まれたメディアからのものと、自分が持っているいくつかの特別な繋がりからしか得られない。

それでも、見ないわけにはいかなかった。

俊はニュース番組のトップ報道に舌打ちをする。

芸能人の何某が結婚したとの内容だった。

「くだらない」

どうでもいいだろと思う。誰が誰と結婚しようと、生活に関係あるのか？他人のそんな情報、全く意味がない。

そもそも、この国にニュース番組が存在しないのかとすら、初めは思ったほどだ。

視聴者の関心の割合に沿わせて番組内容の割合も決めているというのなら、この国は本当にお気楽過ぎる。

「きつと、世界が崩壊しても、日本人は芸能ニュースを流すんだろ
うな」

「そうかもね」

思わず零した言葉に返事がして、俊は驚いて女の方を見た。女はまだ夢の中にいるような恍惚とした表情で彼に寄り添うと、テレビ画面の方を見る。

「皆、息苦しいと思ってるのよ。生きにくい世の中だって」

生きにくい。生存その事に関してはそうは難しくない国に思える。精神的な事を指しているのなら、そうさせてるのは、自分自身じゃないのか？

そういった疑問が浮かびあがるが、口にはせずに黙って女の方を見つめた。

女はその視線に苦笑し

「俊みたいに、勝者には分らないのよ。この国はとっても生きにくい。ほとんどの人間にとってね。だから、一生懸命こつやつて、何でもいいから幸せの種を見つけて大騒ぎするのよ」
と答えた。

自分が勝者なら、ここにはいない。皮肉に聞こえたその言葉に嘲笑を漏らすも、今の自分の偽物の立場は確かに、日本で言う【勝者】の部類だったから、俊は否定せずに黙って肩をすくめた。

「ね、寂しいね」

「は？」

突然零した、女の言葉に俊は瞬きした。一瞬、女が自分の正体を勘づいたのかと身を固くする。もし、その場合はこの先に選べる選択はそう多くはない。

しかし、女はピタリと肌を寄せ、ため息混じりに呟いた。

「皆、きつと寂しがり屋なのよね。だから、何かを繋がってたい。

一人じゃられないのよ」

「じゃ、傍にいれば誰でもいいのか？」

理解できない日本人の感性が未だに残っていたのかと、俊は首を捻る。しかし女は顔を横に振った。

「そう言った意味じゃないの。どんなにたくさんの人といても、孤独な時は孤独だわ」

確かに。それは今の俊の状況そのものだった。

全てが嘘に包まれた人生。たとえ、それに金や名声がついて回っているのだとしても、虚しさと言う孤独は拭えなかった。

「でも、ね。俊」

女はここに二つの身体があるのをもどかさえ思つかのような熱で、囁く。

「私、あなたという時は孤独を感じないの。ううん。あなたがいなければ、もう、どこで何をして、誰といても……」

女の言葉に、嘘の響きは認められなかった。

女の瞳孔、心拍数、その他嘘をつく時に見られる人間の生理的変化は全て見当たらない。つまり、本音だという事だ。

誰にも必要とされなくなった自分。そんな自分を、この女は……。俊はその時、初めて、そう、生まれて初めての感覚に、自分で目を見張った。胸の一番奥底からじんわりと滲むような温かさ。それと同時に広がる甘い、まどろみのような感覚。

そして、全てを賭けても手放したくなくなるような、欲望。

「きつと、これが平和っていう意味なんだろうな」

「え？」

この言葉の意味は深くは話せない。

でも、俊は必要ないとも思った。自分は彼女と言う新しい故郷を作ろうとしていて、彼女はきつとそれを喜んで受け入れるのだから。

「結婚、しよう」

俊はその言葉を口にした。

情報の為でも、身を隠すためでも、誰の為でもない。

ただ、彼女とともに生きていく、新しい人生に賭けてみたくなったのだ。もう、孤独を味わなくていいように。

女が頷き、二人が一つに溶け合い、闇に沈む。

テレビでは、ようやく遠くの国での紛争が、華やかなCMの合間に挟まれている所だった。

告白 6

それから、二人はごくごく普通の順序を辿って結婚した。他の日本人と違う所と言ったら、俊の両親が偽物だったくらいだろう。金を払えば、そういう役割を演じてくれる人間はいくらでもいる。

「私の家族のようにね」

雪子はそう言って、小さく笑った。何か面白いというより、それは相槌の代わりのもののような笑みだった。

東吾は彼女から紹介されたあの女性たちの事を思い出し、「本当に、僕は信じてたよ」とまだ嘘の方が信じられない気持ちで呟いた。

雪子は首肯し、再びナイフの方へと視線を戻した。

俊はそれから数年は、本当に幸せだったという。

日本人になり、日本の社会の中で、日本の生き方をし、日本の幸せだとしても、幸せだったと。

愛する女がいて、毎日食事ができて、安心して眠れる。

時々、国の人間の事を考えては、言いようもない罪悪感にさいなまれもしたが、妻の笑顔を見ていれば薄甘い非現実的な現実以身を沈めていられた。

「そして、数年の歳月が経った時、私が授かったの」

俊は自分でも信じられないほど喜んだ。

日本人と自分の子ではない、女との子どもだと思えたからこそその事だったが、それでも、新しい家族、新しい故郷のさらなる絆として子どもが授かったというのは喜ばしい事だった。

女の方は仕事を辞めた。

もう、その頃には諜報活動の一切も必要もなくなっていたから、

問題なかった。

日に日に膨れていく彼女の腹。
それにそつと手をあててみる。

ポコンと動き、二人で顔を見合わせる。

こみ上げる喜びに自然に零れる笑顔。

掌を蹴り返して来た命の存在に、明るい未来しか彼の前には広がっていないかのようにすら思えた。

彼が子どもの頃は、赤ん坊の誕生をこんなに手放しに喜べる日が来るなんて想像もつかなかった。

食べるものもなく、数日で口にできるのは米がひとかけら、そんな状態も珍しくなかった。無防備に眠るなんて事もない。

いつ、どこで起こるかかわからない爆撃や急襲に怯え、浅い眠りが引き連れてくる悪夢の中をまどろむしかなかった。

女の腹の膨らみが、遠い過去を俊の中に息づく記憶を呼び覚ます。

俊が14の時だ。

母親の臨月が近いその夜、煙の匂いに俊は目が覚めた。

『放火だ』

慌てて起き上がり、母親や妹たちを起こしながら父親の方を見た。

告白 7

父親はいなかった。俊は母親や妹弟達に裏口ではなく、トイレの窓から逃げるように指示すると、台所に急いだ。この狭い家で、生活場所になっている部屋意外にある部屋はそこしかないからだ。

火の手が一層広がり、家を覆いつくそうとしている。

俊は父親を呼びたい気持ちを堪え、煙を吸わないように煤で汚れた袖で口を押さえ進んだ。放火されたのなら、犯人が残っているかもしれない。そう思ったからだ。

途中、農作業用の鎌を見つけ、手に取る。

柄を持つ手が震えていた。

家族の思い出が、生活が、全てが炎に飲み込まれていくのを横目に、台所に続く戸口から中を覗き込んだ。

すぐに足が見えた。

動かない、丸太が二本並んだように転がっている。

息をのむ。

覚悟を決める。

事実を、受け入れる覚悟を、だ。

父親は、死んでいた。

『誰だ！』

炎の向こうで鋭い声が飛んだ。

父の傍で、銃を持った男がこちらに銃口を向けて立っていた。その途端、頭が真っ白になった。

全てを奪う炎。父親を奪った男。

どうして、どうして、

僅かなものまで運命は自分から取り上げるのか。
どうして、どうして、

かけがえのないものまで運命は自分から奪おうとするのか。

『くそおおっ！！』

次いで男が何かを言ったが、俊には聞こえなかった。

男に突っ込んで言ったからだ。

男ごと後方に転倒し、銃声が一発、夜の闇に轟く。

男が銃を取り落とす前に撃鉄で俊の手を弾いた。鎌はその拍子に炎の中に消えてしまった。

家の屋台骨が崩れ、天井の梁が男のすぐ後ろに崩れ落ちて来た。

遠くでガラスが割れるのが聞こえ、母親の声がした。

俊は、家族が遠ざかる音を聴きながら、男に馬乗りになり、思いっきり顔面を何度も殴りつけた。

何度も、何度も、何度も。

拳に血の匂いがついた。

歯の欠片が自分の頬に掠めた。

熱気が喉を焼こうとしていた。

男が命乞いを口にしていた。折られた歯の隙間からそれは言葉と言う形にはならず、俊には自分達を囲みだす炎とその男の出血に、全ての世界が赤く染まったようにすら見えた。

夢中で、ただただ殴った。

哀しかったのかもしれない。

こんな現実には、こんな生活に、こんな……。

もう、このまま死んでもいい、そんな思いが頭をかすめた時だった。

背中から声がした。

ふりかえると一番下の弟だった。逃げ遅れ、自分を必死の思いで探しに来たのだ。

弟は震えながら泣いて、俊の名前を呼んでいた。

その時、自分はまだ、死んではいけないのだと悟った。

もう、自分の下の男は動いてはなかった。

告白 8

そのまま、弟を抱え、俊は男を残し家を後にした。家が焼かれ、父親が殺された正確な理由は分からない。ただ、明確なのは、逃げないといけない。その事だけだった。

あらかじめ決めていた、逃走ルートの上に、母親たちはいた。国境の川沿いの道。

俊は身重の母親、幼い弟と妹を連れて、ひたすらに走った。素足に突き刺さる石の感覚も、暗闇になつとりと流れる川も、遠くで聞える銃声や喧騒も、すべてから逃げたかった。

『おじさんの家まで行けば、安全だから』

母親が顔をひきつらせながらも、微笑んだ。その笑みの中に強さと優しさを見出し、俊はいつか自分もこんな顔で笑える様になりた。そのためには、自分が父の代わりにこの家族を守らねば。

そう、思った、その瞬間だった。

空気が裂けた。

鋭い音が傍を通り抜け、肌を刺す震動が駆け抜けた。

聞きなれたその音に、体が痺れ、目を見開く。

今、微笑みを交わしていた、母親の、その体が跳ねあがった。

闇夜に何かが飛び散り、自分の頬に生暖かな鉄錆びのその液体が散った。

『母さ……ん！？』

だらり、母親はそのまま、笑顔のまま、自分の上に折り重なり、動かなくなった。

母親の肩越しに後ろを見ると、顔を腫らした、あの男が立っていた。

体中の血液が逆流し、体中の毛が逆立った。

俊はその後の自分の行動をよく覚えてはいない。

ただ、それが生まれて初めての人殺しで、その男が履いていた靴

が日本のメーカーのものだったのは、その後一度も忘れた事はなかった。

そして、その時、痛感した。

未来はいつも想像と期待を凌駕するのだと。

現実が想像力を凌駕する形で裏切り続けるとしても、こういった形なら、まだこの世界も生きていく価値はあるのだろう。

俊は過去への旅を止め、再び意識を妻の下へと戻した。

いつも、運命は自分に背を向けていると思っていた。

父を失い、母を失い、自分を失い、そして祖国を失った。

そんな自分に安らぎや幸福が訪れるなんて……。

「俊、今日の空も綺麗ね。ちよつと外に出ない？」

妻が独り言のように呟くと窓の外に目を向けた。俊もつられてそちらに目をやる。

遠い祖国へ繋がる空は、今を持っても透明感はなく、その下に広がる社会も未だぼんやりとした焦点の合わないものではあったが、俊は幸福に目を細めた。

幸せとは、何か、確かな手触りで実感しつつある自分には、もう、ここがどこで、自分が何人なのかも関係ない気がしはじめていた。

「父はね、私の存在が大きくなるにつれ、日本人になる覚悟を決めて行ったそうよ」

雪子は何故か誇らしげにそう言った。東吾はここまでの話に、息をつく。

もう、作り話だなんて思っていなかった。完全なリアリティーを感じているのかと言われれば、素直に頷けはしないが、全くの嘘だとも言いきれなかった。

それに、この話の俊と言う男。雪子の父親に当たるその人物の気

持ちが、何となくだがわかる気がしていた。

孤独に満たされない気持ち。

居場所のない不安。

過去の自分を捨て、新しい生活に希望を見出して行こうとする、その想い。

自分も、雪子とそうしていきたかったのだ。いや、今でも、やはり自分の腐った過去を清算し、新たな一歩を踏み出すのならば彼女じゃないといけないと思っている。

俊が女を憎い日本人でも愛したように、自分も雪子が殺人者だろうがやはり愛しているのだ。

告白 9

時計を見た。式の時間まであと10分。

東吾は顔をあげると、もう一度死体の方を睨みつけた。邪魔だ。どう考えても邪魔だ。

初めは動揺したが、よく考えれば、この死体さえなければなんとかなるんじゃないだろうか？

牧師の失踪。

それ自体は多少の騒ぎになるのかもしれないが、雪子が忌々しい警察に拘束され、自分の幸せをかき乱されることと比べたら、こんな中年の死体一つの隠ぺいの方がずっと取るべき道の様な気がした。

披露宴は別として、式には幸い、雪子の親族と自分の仲間しか呼んでいない。勘当状態の自分の式に親族を招待しなかったのが、今になって幸いした。

「雪子。ひとまず逃げよう。それから幾らでも君の話を聞かし、これから事も考える」

「え、でも……」

雪子は戸惑い眉を寄せると、死体の方を見た。

東吾は昔の感覚がよみがえるのを感じながら、口の端に笑みを浮かべた。人を一人殺したきりの雪子が殺し屋と言うのなら、自分はその道のプロだ。

『やんちゃ』だった頃、殺しはしなかったが悪事の隠蔽は山ほどした。父親が警察のお偉いだから、という安心感が行動を大胆にさせていたのは否定しないが、そんな権力を行使したのは数えるほどしかない。

そして、その頃の仲間は、今日、ここの式に来る仲間だ。

多少、金がかかるかもしれないが、お互い弱みは握りあっている。さほどのリスクもデメリットも負う事なく協力は望めるだろう。

「言っただろ。俺は君のためなら命だつて差し出す覚悟なんだ。君を守りたい。だから、誰かが来る前に……」

素早く頭が回転する。まずは携帯で仲間の一人に連絡を取り、式場の他のスタッフがこの現場に近寄らないように工作してもらう。その間に、他の手の空いた連中には死体処理に回ってもらおう。

それが無理なら、アリバイ工作だ。

アリバイ工作。そうだ、そののいいかもしれない。

雪子がここに来た時は神父はもう死んでいたというのはどうだ？
そして、あまりの事に驚き、落ちていたナイフをたまたま拾ってしまっただけなんだと……。

何かを隠ぺいし、事実を曲げるのなら。嘘は最小限がいい。

100ある事実の中で、99の事実に1の嘘を混ぜてもまずはばれないし、ほころびも少なくなる。その1の嘘が、隠したい事実を隠蔽する、その一点のみに効果的であればいいだけの話だ。

東吾は自身の中で素早く方向性を決めると、雪子の方を振り返った。

「でも」

「君の父親が同じ立場なら、きっと、同じことをしたと思う」

「東吾さん」

目を伏せる雪子。その俯いた顔も美しいと思った。そう思うと、尚更、彼女を守らねば、そんな気持ちかわき上がり、東吾は彼女の手を強引に引いた。

「行こう」

二人が立ちあがった、その時だった。

教会のドアが音を立てた。

ぎくりと心臓が跳ね、喉が一気に締めあげられた。

「東吾さん」

雪子が声を震わせ、自分にしがみつく。

東吾は思わず雪子を庇うように彼女の前に立ち、その方向を凝視した。

ゆつくりと扉が開き、外の光が薄暗い教会に差し込む。空気が流れ、外の空気とここにある鉄の匂いの濁った空気が交ざり合い始める。

「大丈夫」

東吾は雪子の手の上に自分のそれを重ねた。

僅かに開いたその扉の隙間から、何者かの手が覗いていた。

その手はゆっくりと扉を開き、その身を滑り込ませてきた。

東吾は小さく声を上げる。

現れたのは、一人ではなかったからだ。

「お義母さん、それにお姉さんたちも……」

現れたのは雪子の家族だった。いや、雪子の話が本当なら、家族を装った全くの他人と言う事になるのだが、東吾には他の呼び方が思いつかなかった。

義母……役の晴美、続いて姉の氷雨に妹の風香が教会内に入ってきた。三人は二人の様子に特に不審がる様子も見せず、にこやかにこちらを見ていた。

晴美は新婦の母親らしい清楚なドレスに、黒い手袋をしていた。そういえば、彼女はいつも手袋をしているな、と東吾は小さく首を傾げた。

料理教室をしている関係、手が荒れやすいからだと聞いていたが、もし、胡散臭い家業の人間なのだとしたら、料理しているのは食材ではないのかもしれない。

その彼女が、ずっと切れ長の目を細めた。

「今日はおめでとう。雪子。そして、東吾さん」

薄く引かれた紅の合間から零れる声は、祝福そのものの喜びに満ちていて、東吾は困惑した。

彼女達には後ろの死体が見えないのか、その事が気になり、もし、まだ気がついていないのならやり過ごせるのではないかと、少し体をずらした。

しかし、そんな奇跡は都合良くは起こらない。

末娘の風香は、彼女の通うとい女子高の学生服そのままで両手を腰に当て、少々こ憎たらしい表情で歩み寄りながら東吾の顔を値踏みするように見つめた。

丈の短いチエック柄のスカートが妙に挑発的に見える。

「何？ これから、どこか行くつもり？ 死体のオッサンを置いて」

「風香ちゃん……」

風香はその、肩の辺りで外側に跳ね上がった茶髪を揺らし、生意気そうな笑みに顔を歪めた。

「そりゃ、駄目よ。全く、駄目よね。逃げても、死体は残っちゃうじゃん。すぐにお縄頂戴。アウトだよ」

風香は東吾の前で足を止めると、その鼻先に自分の人差し指を横に振って見せた。

「いい？ 殺人の作法としては、罪を誤魔化すなら完璧に隠すか、自首して正当防衛だったふりをするかだよ。雪子姉さんの場合、美人なんだから、このおっさんに言い寄られただのなんだの言えはいじゃん。それとも、もう、オッサンは見つけた時には死んじやつてた事にする？ それもナンセンスよ。雪姉さんについた血が返り血かそうでないかくらい、調べればすぐにわかる。じゃ、これはどう？ たとえば……」

風香は次から次へと言葉を繰り出して行く。東吾は自分の考えまですのついでのように否定され、少し決まりの悪い思いをしながらも、他の事を考えていた。

風香にしろ、晴美も未だに一言も発しない姉の氷雨もこの死体が怖くないのか？ と、言う事だ。

三人とも死体の存在はわかっていようだ。なのに「きゃあ」の悲鳴の一つもなく、死体に落とされる視線はまるでカーペットにできた染みでも見ているようだ。

と、いうことは……。

「あの、もしかして皆さん、ここに死体があるのをご存じだったんですか？」

東吾は風香の話の切れ目を待つのを諦め、彼女の息継ぎの、その僅かな間に思い切って小さなその疑問を口にした。

告白 11

その瞬間、場の空気が凍りついた。

氷雨が、まさに冷たい雨のように射すような凍てついた視線を風香に投げる。風香はその視線に怯えるように肩をすくめ、舌打ちをした。

「風香ちゃん」

東吾の後ろで雪子がたしなめるような声を出す。

一体、この4人の関係は何なのだろう？

死体、花嫁、諜報員の父、偽家族

キーワードから答えを導くは解法はまだ見いだせない。

「風香ちゃん、ちよっと、黙ってしましょね」

晴美の声がぴりつと緊張が溢れて決壊してしまいそんな空気を引き締めた。

義母は結いあげられた髪のはつれをただすように、色気のある仕草でそのうなじを少し撫で上げながら歩み寄ると、その手で風香の肩を抱いた。

「しょうのない子」と青ざめる風香の頬を撫でる、その手袋の指が何とも官能的だった。

風香はまるで親に捨てられた子どものような顔になり、晴美を見上げる。怯えているようにも見えた。

が、晴美は慈愛の眼差しそのもので頷いて見せる。そして、素早く念押しするかのように、氷雨と雪子に視線を送り風香を下がらせた。

その鮮やかな視線の交錯にどんな意味があるのか、東吾には分かなかった。が、ここは晴美の言葉を待つのがいいという事だけは、修羅場をいくつも踏んできた勘が告げていた。

偽家族には偽家族なりのヒエラルキーが存在しているのかもしれない。そして、たぶん、その頂点にいるのは晴美だ。

案の定、晴美はピンと背筋を伸ばした綺麗な姿勢のまま東吾を正面から見据えると、静かに微笑んだ。

それは真っ直ぐに咲く百合の美しさを連想させたが、同時に東吾の中身を押し量っているのだと言う凄味があつた。反抗も逃避も、誤魔化しすら許さない、そんな凄みだ。

しばし向かい合ってから、晴美は「そう」と、何がわかったのか呟くと、東吾の後ろにいる雪子の方に視線をやった。

「雪子さん。話は、まだ途中なのね」

「はい」

雪子は頷く。そうだ、話はまだ彼女の父親の話までだ。なぜ、彼女が殺し屋になり、自分との結婚式のこの日に神父を殺したのかは明かしていない。

「なんだ、まったく、相変わらず雪姉さんはのんびりなんだから」
風香の減らず口がまた動きだした。さっきの反省は何だったのかと思わせるほどの饒舌は、一度エンジンがかかると止まらない。

「とつくに終わってると思ってた。私ならきつと3回くらい話せるわ。だって、そうでしょう？ もうすぐ時間よ？ さつさと済ませちゃいなよ。っていうか、必要あるの？ こういうの。どうせ……」

「風香」

今度彼女の暴走を止めたのは氷雨だった。彼女は少しつりあがつたその目をさらに吊りあがらせ、射殺しかね無いほどの視線で風香を睨みつけている。

風香は息をのみ、今度こそ黙った。

晴美はその様子を、困った娘たちを見守る母親そのものの目で見つめてから、小さな溜息とも苦笑ともつかない吐息を漏らして二人の方に視線を戻した。

「雪子さん。続けて。風香ちゃんの言うように、時間はそんなにな

いわ」

「はい」

雪子はそう言うと、東吾の手をとった。酷く冷たい手に、東吾は振り返り、彼女の瞳を探る。

「東吾さん。時間がないの。最後まで、どうか、聞いて」

時間がないのなら、むしろ話しているところじゃないだろう。そう口にしかけて東吾は言葉を飲みこんだ。

晴美も氷雨や風香も、話が終わるまで東吾を逃がすつもりはないように感じられたし、なによりも、雪子が念押しするその言葉が切実だったからだ。

「わかった。ごめん」

東吾は短く答えると、雪子に体を向けた。

告白 12

「私が生まれた時にはね、母親はもういなかったの」

雪子は一度、晴美の方を一瞥してから少し遠慮するような口調でそう言った。東吾もなぜか妙な据わりの悪さを覚えたが、当の晴美はやはり笑みを湛えたまま、二人を見守っている。

雪子はもう一度同じ席に座り直すと、両手を膝の上に置き、その握りしめられた手をじっと見つめた。

そして、寂しげに微笑んだ。

「私にとっては、父との時間が一番幸せだったわ。父にとって、そうでないにしても……」

雪子が物心ついた頃には、父親は諜報部員の仕事を再開していた。情勢が変わったのだ。

俊の祖国にあり、新しい国の元に監禁状態にあった王族が、同盟国への亡命を果たしたのだ。そして一気に情勢は再び国の復活へと風が吹き始めた。

それまで新国家に虐げられていた元の国民達が、軍部の一部と呼応し、反撃の狼煙を上げた。

各国に潜伏していた諜報部員達の働きも目覚ましかった。大量の外貨の獲得に、中には10年の間に世界的にも有数の軍事企業のトップにのし上がっている人間すらいた。

土地を奪われた祖国は、祖国奪回のそのスローガンで世界を嵐のように巻き取ろうとしていた。

『日本に恩を感じないのかって？ 感じないね。ここでの生活は単なる夢だよ』

俊は娘に訊かれた時に、そう言ってその優しい眼を細めた。

雪子は早朝のロードワークの後の、この時間が好きだった。河原を父親と筋肉をほぐすように散歩する。

まだ14だった雪子には30キロのランニングの後のこの散歩が、

辛いわけではないわけではなかったが、それでも、父親と唯一穏やかに話せるこの時間を、何よりも愛していた。

この時だけは、二人は父の祖国の言葉で会話した。

河原の風にかき消されるほどのその二人の声は、まるで二人だけの内緒話のようで、くすぐったかった。

時に、英語や中国語、フランス語やアラビア語なんかも混じるのだが、雪子は父の祖国の言葉が一番好きだった。祖国の言葉で話す時、父の声が他の言葉を話す時より少しだけ低く穏やかになり、口数も増えるからだ。

その日も、やはり同じ思いで父の隣に並んでいた。

雪子は幼いころから抱きしめられた事も、繋がれた覚えすらない、父の、その大きな手にその時も触れたいと思っていた。

斜め後ろから見る、父親のその顔はいつも引き締まっていて、遠くを見据えている。朝日に照らされたその目は、明るい亜麻色に透き通り、そこにかかる自分と同じ色の前髪に幾度となく触れたい衝動にかられていた。

いつも遠くを見つめながら歩く父に、一度、何を見ているのだと尋ねたら、父ははにかんで『祖国の空だ。いつかお前にも見せたいよ』と言った。

その言葉は、雪子にとっての何よりの宝になった。

父と祖国の空を見る

その夢は、いつしか夢より現実的で、目標より生々しい、欲望に変わって行った。

それは同時に、顔も見た事のない母親に、勝利したような優越感にも変化した。

父がかつて日本に溶け込むために愛した女。しかし、その女は選ばれなかった。父が祖国の空をとに見る相手に選んだのは、自分なのだ。

指先が掠める度に、ちりつと甘い痛みが胸を走る。

その都度、慌てて父の顔を伺うが、それに彼が反応を示した事は一度もない。雪子は残念なような安心したような複雑な気持ちで、再び父と同じ方向をむく。

ふと、影が目に入った。

朝日に長く伸びたその影は、父のそれとさほどの差を感じなかった。

早く、早くこのような形で歩きたい。

河原を吹き抜ける風に、髪がさらわれる。

ふと、自身の手を見つめてみた。

まだまだあどけなさを残すその手に、雪子は焦りを感じる。

早く、早く……父があの子の、母親の代わりを見つける前に、と。

『どうした？』

父の声に雪子は顔を上げた。首を横に振る。

二人はそのままランニングコースから外れ、土手を駆け降りた。

冬の入口に立ったばかりの早朝の空気は、火照った頬に心地よい。

まだ穂の開ききらない若いススキが金色の朝日の中揺れている。

耳に届くのは微かな人の生活の音と、遠くの陸橋を渡る電車の音だけだ。

金木犀の香りがどこからか風に運ばれ、雪子のその白い滑らかな頬を撫でた時だった、半歩前に行く父が歩みを止めた。

どうしたのだと、今度は雪子が首を傾げる番だった。

彼は朝日を背に振り返ると密やかに微笑む。

そして、初めて雪子の頭を、その懂れてやまなかった手でそっと撫でた。

『父さんの「初めて」も、お前の年だったよ』

それは、昔話をするような口調でも、用件を伝えるような口調でもなかった。まるで、少年が隠しきれないその想いをこらえきれず思わず漏らしてしまった、そんな口調だ。

雪子の心臓が跳ねあがった。

とたんに、体中に熱を感じ手を握りしめる。ふわふわとした不安定でいて笑みを耐える事の出来ない、なんとも柔らかな気持ちに雪子は泣きそうにすらなり、父のその視線から逃げるように自分の足元を見つめた。

『雪子には、初めては誰がいいか父さんなりに考えたんだ。でもな』

父が初めて自分に視線を合わせるのを感じた。彼の影が縮まり、自分を同じ大きさになるのを見つめる。

自分の存在の意味を、雪子なりに理解しているつもりだった。

他の同い年の子どもと違う事はとくに心得ていたし、特別なその境遇を誇りにすら思っていた。

自分にとって、林俊という人間は父親と言うだけではない。あえて言うのなら、全て、だったのだ。

雪子は、彼の為に生き、彼の為に命すら投げ出したいと思っていた。

母親とは違うのだと思った。母より選ばれた自分はその気持ちにこたえたいと思った。

だから、幼い頃から何度大けがを繰り返そうが、寂しい思いをしようが、厳しい訓練や勉強を強いられようが、平気だったのだ。

父は自分を愛してくれている。母親よりも、自分を選んだ事が何よりの証拠だ、と。

『父さんは、雪子の成長を一番に自分で実感したいんだ。……いいね？』

その言葉に、自分の中にあつた硬い硬い蕾がふるふると震え、雪解けのように解かれるのを感じた。

ようやく、ようやく、自分は、ただの娘ではなく、父のパートナーとして認められるのだ。

一瞬にして込み上げて来た高揚感は、雪子の声を震わせた。

どのように、何語で返事をしたのか覚えていない。

しかし、雪子の返事に、俊が嬉しげに頷いた、それだけは雪子のその心に深く刻まれた。

待てよ。

と、言いたい気持ちを、東吾はぐっ抑えて唇を結んだ。

素早く視線を動かし、他の3人を見回してから雪子の俯きがちなその顔に目を止める。

なんだ、今の話の流れでは、雪子の初めての相手は実の父親だった、そう言う事なのか？

東吾は死体を見たとき以上のショックを受け、雪子の唇を凝視した。彼女と体を重ねた事はもちろんある。そのたびに、溶けそうなこの唇に溺れ、甘い香りに包まれ、もう他のどんな男にも触れさせたくない、独占欲が募るのを痛いほど感じていた。

それほど雪子の体は綺麗だったし、むしろ神聖なものにすら思えた。なのに、実の父親と？

「東吾さん？」

絶句しているのに気がついたのか、雪子はその黒目がちの瞳でこちらを覗き込んだ。瞬間、やるせないほどの焦げ付く思いに息が詰まる。

今、すぐにこの場で、問いただしたい気もした。こんな婉曲な表現の方が、もっと耐えられないような気がした。

しかし、一方で、所詮過去の事なのだと冷静になろうとする自分も自覚していた。

だから、東吾は無理に笑顔を作ると雪子に頷いて見せた。

過去がどうであれ、彼女のその体がどこの誰に仕込まれたものなのであれ、今後、他の手に渡らねばいいだけの話だ。そりゃ、できれば、過去にさかのぼって彼女の全てを自分のものになりたい願望はあったが、馬鹿げているのは十分にわかっている。

それに、だ。

東吾は雪子の髪を撫でた。

急上昇した体温が、彼女に触れただけで、穏やかさを取り戻して行く。

東吾自身の初体験も人に言えたものではなかった。そういえば、偶然にも雪子と同じ年だ。

軽く目を閉じて、再び雪子が話し始めるのを待ちながら、自身の過去を顧みた。

あの頃、何をやっても怖いものはなく、何をやっても満たされず、何にも攻撃的で破壊衝動の塊のように暴れまわる毎日を送っていた。

付き合っている連中も、まともな奴は一人もいない。今付き合いが続いているのはかろうじて少年院や刑務所に送られなかった運のいい奴ばかりで、その頃はそういった法的処置の網に不運に引っ掛かった奴も含め、そういう奴らと考える限りの悪さをして回った。

女性に興味を持ち始めたこの頃、仲間内で流行っている遊びがあった。

『パーティー』だ。

てごろな女をナンパでも脅しても、何でもいいから『ゲスト』として自分達のたまり場まで連れて来て、まわす。それだけのシンプルな、『遊び』。

相手が同意の上の場合もあればそうでない場合もある。どちらでも、特に問題はなかった。暴れれば殴るし、生意気なら写真を撮る。たったそれだけで、女たちは大人しくなった。

その遊びが流行る中、東吾はまだ中学で『仲間』に入れてもらえなかった。リーダー格の中卒上がりの男がいつもからかい半分に「後学のために見学しとけ」と言って記録係を押しつけるだけだ。

その日も、東吾は仲間に入らず、いい加減むしゃくしゃして、デジカメを放り出し、当時たまり場に使っていた廃工場から一人外に出た。

後ろでは楽しそうな狂乱の音がしていた。その日のパーティーの

ゲストは、女子中学生で、東吾と同じ年の大人しそうな女だった。万引きしていたのを見つけ、脅して連れて来たのだ。

なんだ、女なら年齢制限なしかよ。

東吾はふてくされ、まだ味を覚えたばかりの煙草の端を噛んで足もとの空き缶を思いっきり蹴り上げた。

それは虚しい音を立てて夕闇の中に転がって行った。

女は、その空き缶の転がる先に立っていた。

夏の夜と夕の境目、白く長い足が印象的だった。

女は少し困った様な顔をして、こちらにそっと笑みを浮かべると空き缶を拾い上げ、東吾に何か言った。

東吾は聞いてはいなかった。

ただ、「俺だつてやれるんだ」その声が自分の頭の中に響き、次の瞬間、思いっきり腕を振り上げていた。

そうしてすませた初体験は、想像よりずっと気分の悪いものだった。

こんなの、自慢にもならねえ、と東吾は女の上から降り、ベルトを止めなおした。その時、耳に奇妙な音がした。

不審に思い、眉をよせ、振り返る。女が蹲って泣いていた。そんな光景は日常茶飯事だ。ゲストの大半はそうだったし、さした罪悪感なんて感じない。いつもはいい所、「運が悪かったな、さっさと忘れるといいよ」と心の中で声をかけるくらいだ。

しかし、自分が手につけた女の泣き声は違って聞こえた。

傍観者から、当事者になった、その違いなのかもしれないが、女の泣き声は何とも苦しげに東吾の鼓膜を打った。

苦しげで、恨めしげだ。

東吾が呆然としてその様子を見つめている、その時だった。女が急に顔を上げた。そして乱れた髪とその隙間から目だけぎらつかせ、身動きのできない東吾を睨みつけたのだ。

「許さない。絶対に」

唸り声のような地を這うその声に、ぞっとした。体中に冷たい物

が駆け巡り、後悔の影がどつと背中にしがみついた。

東吾は舌打ちして地面を蹴ると、「死ね。ブス」と捨て台詞を吐き、そそくさと女に背を向けた。

精一杯の虚勢だった。

本心は怖くて怖くて、さっさと忘れたいのは、襲われた女の方ではなく、自分の方だ。少なくとも東吾はそう思った。

告白 15

「東吾さん、大丈夫？」

「あ、はい」

晴美の声に東吾は我に返り、頷いた。

雪子は依然、俯いているがその表情はさっきのそれより硬いような気がした。唇がいつそう引き締められ、頬には僅かに赤味がさしている。じつと手元を見据えるその目には喜びや、恥じらいなんて言うものは一切感じられなかった。

「その日、父は私をいろんな所に連れて行ってくれたわ。晴美さんや氷雨さんに出会ったのは、その時」

雪子がそう告げるが、二人は彫刻のようにその言葉には反応を示さなかった。

「自分の仲間、自分のネットワーク、自分の隠し金庫や隠れ家まで諜報活動におおよそ自分が使用しているものの全てと、私の顔つなぎをした」

ふと、雪子の視線が晴美に止まる。晴美は僅かに苦笑を浮かべた。

「中には私が娘だとわかると、あからさまに顔をしかめる人もいたわ」

それは、そうだろうと東吾も思う。娘を妻代わりになんて、悪趣味以外の何物でもない。きつと、晴美もその一人だったのだろう。

雪子は寂しい笑みを晴美に返し、十字架を今度は振り仰いだ。

少し高くなった太陽から差し込む陽射しの強さと角度が変わっており、まるで、雪子に向かって、光は降り注いでいるように見える。

「私はね、父の知り合い達の顔が歪むたびに、自分のせいで父が肩身の狭い思いや恥をかいているんじゃないかって心配になったの。でも、父は肩をすくめて『娘ほどいいものはない。始めからすつか

り全て、自分好みにできるからな』と答えるだけだったわ。その言葉にちよつとの大人のいやらしさを感じないではなかったけど、それでも嬉しい気持ちの方が強かった」

少女雪子にとっては、父親に選ばれた。その事が何よりも重要で誇りだったのだろう。

東吾はさつき彼女に対して思った独占の欲望を思い出し、ようやく彼女の父親の感覚が少しわかった気がした。

確かに、こんなに美しく聡明な女性を、誰の手にも汚されずに自分の理想に育て、自分の傍に置く。まさに、それは男の理想の様な気もした。

「父は……」

雪子はその美しい形の唇から、吐息と一緒に言葉を落とした。

「ひととおり、顔を合わせを済ませると、私を家に残し夕飯には帰ってくるって出て行ってしまったわ」

雪子は残された部屋で一人、いよいよと言う想いに、不安と喜びと入り混じった気持ちになって落ち着かなかった。

当時二人が住んでいたのは、父が母と住んでいたマンションそのまま、いわゆる高級マンションの類だった。対面式のシステムキッチンが臨むダイニングは6畳ほどだが、その隣に続くリビングは15畳ほどの広さがあった。そこには大型のテレビとソファにテーブルしか置かれていないので、数字より広く感じる。

奥にはそれぞれの部屋が別にあり、それでも一つ部屋があまり、ウォークインクローゼットもあった。

二人が住むにしては部屋が多すぎ、思い出を埋めるには広すぎる部屋だった。

一見、いやどのように調べられても他の家とさした変わりはない。少し違う所と言えば、全て日本製に限られていた所だ。父は毎年のようにそれらを買って替える習慣があった。

父は『日本製のクオリティの程度で、日本人の価値を感じられる

から』とその理由を言っていたが、雪子にはその意味はよくは分らなかった。

ただ、母親がいた時代のを捨て、新しい家電や家具を入れる度、母親の影が遠のき、自分と父親二人だけの空間に塗り替えられていくようで、雪子にはそれが嬉しかった。

そんな部屋を掃除し、父の為に食事を作り、彼の帰りを待つ。なんらいつもと変わらないその行為に対しても、その日は一つ一つが昨日までと意味合いが違うような気すらした。

自分は、娘じゃなくなるのだ。

彼の、林俊という男のパートナーになるのだ、名実ともに。

夕食の支度を終え、ソファに腰を下ろす。自分の身を抱きしめ、目を瞑るとトクトクと鳴りやまない自分の鼓動が聞こえた。

他には何にも聞こえない静かな夜。

雪子は幸せだった。

もうすぐ、あの手が自分に触れてくれる。あの眼差しに自分だけが映る。

父を落胆させないだろうか、噂に聞く通り初めは苦痛を伴うのだろうか。そんな不安はぼんやりと幸福感の輪郭をぼやかしたが、それでも……。

その時だった、世界が一瞬にして、暗闇に沈んだ。

部屋の灯りと言う灯りが、落ちたのだ。

告白 16

瞬間、雪子はすぐに身をかがめ、ソファの背に隠れた。素早く視線を展開し、窓の外を見る。

カーテンの隙間からは、いつもの美しい夜景。

つまり、停電はここだけと言う事だ。

こんな日に……。雪子は舌打ちしたい気持ちをぐっと抑え、全身の神経を尖らせる。暗闇でも物を見る目にも自信はあったが、暗闇では視覚より全身に張りめぐらせるセンサーの様な神経の方がずっと信頼が置けた。

父との訓練は、なにも昼日中ばかりではなかった。窓のない暗闇で、殴り合う。時には刃物や警棒などの武器も使用する。そんな訓練は普通の子が親と週末にデパートへ出かけるのと同じくらいの回数ばかりこなしていた。

玄関から続く、台所とリビングの間の扉が軋むのが微かに聞えた。人の気配はしない。

空気の揺れも、相手の呼吸音もない。

しかし、雪子にははつきりとこの場に第三者が侵入しているのをしっかりと感じとれていた。

それは、敢えて言うのなら、相手の視線の気配だろうか。

雪子は興奮を抑え、密かに呼吸を整えた。

恐怖はない。そう、あるのは興奮に変わりそうな高揚感と……。

楽しみだ。

それを実感した時、雪子は思わず笑みを零した。そう、今、自分はこの状況を楽しんでいる。

考えても見ろ、この日だからいいのかもしれない。

相手がなにもかはまだ分からない、ただの物取りかもしれないし、諜報活動に関わる者かもしれない。

ただ、少なくともこの家に人間がいるのを知っていて、ブレーカ

ーを落とすという侵入方法を選んできている。もちろん鍵はかけていたから、鍵も破つての事だ。

おおよそ、好意的な訪問者だとは思えない。

て、ことは……実力を思う存分に発揮していい相手と言う事だ。

雪子は唇を舐めた。

そうだ、父に示そう。自分が真に彼の傍らにいる者としてふさわしい事を。この侵入者を片付け、父に差し出すのだ。

きつと、喜んでくれる。そして、あの大きくて綺麗な手で自分を……。

空気が裂けた音がしたのはその時だった。

雪子の僅か5cm先のカーペットに穴が開く。

焦げくさい匂いの後に追いかけて来たのは、火薬の匂い。サイレンサーだ！

雪子は体を真つ二つに折るように身を伏せるとソファを蹴った。その身は肩の高さほどの厚みとなり、スルリ、テーブルの下に滑り込む。

雪子の影を追いかけるようにその数瞬後、再びカーペットに穴が開いた。

相手は上にいる。

照射角度からすぐに相手の位置を計算するも、プロなら打つてすぐに移動する事はわかっていた。

しかも、相手のこの攻撃は威嚇だ。しとめるのなら二度、続けて打つてくる。その方が殺傷率が格段に上がるからだ。

カーテンが揺れる気配がした。

もう、相手は気配を殺そうとはしていない。こちらの力量を見極めるかのような距離だ。

窓際に相手が立っている。

テーブルとの距離は約2m、まだ手足の短い自分には少し骨な距離だ。

しかし、負ける気は全くしなかった。

告白 17

相手は男か女か、武器はサイレンサー付きの銃のみなのか、そもそも相手は一人なのか、様々な可能性を頭に叩き込みながら、雪子はその瞬間を待つ。

それは、相手も同じようだ。雪子がテーブルの下に隠れているのはわかっているはずだ。獲物を狙う肉食獣の様な視線が、雪子のシルエットをじつと見つめていた。

時計の針の音だけが、この薄暗い世界で快活に動いていた。

父親が唯一買い替えなかったものだ。祖国から持ってきたものだから、と。古い木製の仕掛け時計だった。

大きさは70cmほどで、壁に掛けられてはいたが結構な重量感のあるものだ。下の部分に大きな振り子が揺れていて、上の部分の文字盤の真ん中には小さな窓がついている。

その窓はなぜか、8時を指す時だけ開き、中から可愛い女の子と男の子の人形が出てくる。そして音楽に合わせて踊るのだ。

なぜ、そんな中途半端な時間なのかわからなかったが、父は昼と夜の別れの時だからだと雪子には教えてくれていた。

別れの前のラストダンス。微笑み合う男女は泣きながら笑っているのだと。

時計の長身が傾く音がした。

窓が開く。

それが、合図だった。

影が銃を構えた。

雪子がテーブルを蹴り上げた。

照射された弾道はテーブルを貫き、雪子の肩の肉を数ミリ抉ったがそんなのは痛みの中には入らなかった。

心臓が喜びの悲鳴を上げていた。

雪子は低くかがんだ体勢から、しなやかなその足の筋力をしなら

せ思いつきりしてとの距離を詰めた。

直線な動きは危険だが、迷いはなく隙が少ない。

雪子は躊躇なく拳を突き出した。

しかし、影は頭を横に振り寸で避けると、雪子の腕の内側を軽く弾いた。

「！！」

それだけで雪子の軌道はずれを見せ、着地を危うくする。しかし、雪子の口元には笑みが浮かんだままだった。

雪子の最大の武器、それは柔らかな体と天性の勘だった。

床に崩れおちそうな体を、柔らかく関節を曲げ、しなやかな筋肉を床に押し当てるようにし、転倒を回避させる。

そのまま軽く手をつき、思いつきり足を払った。

影はそれを軽やかなステップで避ける。

オルゴールの音が優しく流れていた。

別れを憂い、愛を引き裂く運命にそれでもほほ笑む二つの人形。

カーテンが揺れる。青白い月明かりが切れ切れに部屋に差し込み、相手の手や足元を照らした。

銀色の光は雪子の烏羽色の髪に揺れ、その白い肌をさらに白く見せた。

雪子が手を繰り出す。

影が避けて銃を放つ。

雪子が避ける。

二発目が放たれる。

それに今度は向かうように踏み込む。

思いつきり雪子の足が跳ねあげられた。

銃を持つ手にそれはあたり、黒い鉄の塊が放物線を描いて部屋の端に鎮座する暗闇に飲み込まれた。

音楽が流転する。

終幕に向かうのを知る踊り子はそれでもステップを止めない。

影が踏み出し思いつきり腹を蹴り上げた。

回避しようとするも、一瞬遅かった。

凶器と化したそれは、思いつきり雪子の体を二つ折りにするよう
に振り切られる。

しかし、雪子の勘はその持ち主を助けていた。

腹に食い込む、その僅か前に自分で後方に飛んだのだ。そのため
に衝撃が緩和され、雪子はその足にしがみつく。

体中が喜びの声をあげていた。

命をかけたスリル。

恐怖と興奮の狭間の快感。

自分の中に秘められていた狂おしいほどの攻撃性に、心が躍る。

雪子は、笑顔に顔をゆがめながら相手を思いつきり引き倒した。

告白 18

- オルゴールが最後の音を鳴らし

二人の転倒が酷い不協和音を立てる

- 愛しあう二つの人形は見つめあう

雪子は構わず馬乗りになった

- もの悲しくも甘いメロディーが静かに闇に溶け

影は男だ。呻く声がそれを教え、相手の苦痛がさらなる欲望をくすぐる

- 人形は背をむける

自由を奪うために男の体の上を這い、その手首を締めあげた

- 最後の逢瀬は終わり、人形は再び闇の中

首を巡らせ、相手を覗き込む。月明かりに照らされていて、その顔が露わになっていた。

- 扉が閉じた

ぞくぞくする興奮に頬を染めた雪子の目と、その目が交錯した。

- ラストダンスが終わった

雪子は言葉を失った。

目を見開き、息を飲む。

時計は切ない恋人達の逢瀬をその中に閉じ込め、もうここには永遠に甘い旋律は流れないと告げるように、無機質で無情な時を刻み始める。

雪子を見つめ返す瞳は、ナイフのように鋭く、氷のように冷たかった。

だが、雪子の鼓動はもう歓びの歌を歌わない。何故なら、冷たく、冴え冴えとしたその瞳は

「お父さん」

愛してやまない、唯一の人、林俊。その彼の瞳だったから。

雪子は糸を切られたマリオネットのように腕をたらし、ただただ信じられない思いで彼の目を見つめた。

暗闇に沈黙が、冬の夜明けの湖に張る薄氷のように広がっていった。

その薄氷の上を吹き抜ける風のような声が、した。

「見事な動きだ」

父親のその目は笑みに細められている。雪子は緊張にひきつっていた頬をふと緩め、手首を締めあげていた力を解いた。

なんだ、父の試験だったのか。安堵のため息が静かに鼻から抜けかけた時だった。

「だがな、いつも言ってるだろう？」

鋭い声が飛び、緊張に雪子は再び眉をよせる。

父は一度目を伏せると

「お前には接近戦は不利だつてな！」

次の瞬間、思いつきり雪子の顎が打ち抜かれた。

世界が真っ白になり、意識が遠のきかける。

彼女のまだか弱い体は宙に浮き、後方に吹っ飛んだ。体が重力に従い床に叩きつけられる、しかし、雪子が意識を十分回復させる間

を、父は与えなかった。

すぐさま彼女の体を蹴り上げる。振りぬかれた足には雪子の骨が幾本か折れた事を教える感触を伝えていた。

迷いも躊躇も、情けすらないその動きは……。

雪子は壁にしたたか背を打ちつけられ、ぼんやりとしながらも近付いてくる、輪郭のぼやけたその影を見つめた。指先に固いものが触れるが、視線を一時たりともその影から離せない。

なぜなら、影が発するのは訓練や試験の様な生温いものではなかったからだ。

ピリピリと肌を射し、心臓を射抜くような鋭い感覚。

そう、これはきつと殺気だ。

父は、いや、林俊という男は今、本気で自分を殺そうとしている。

「何故」

鈍い痛みに呻きながら、雪子は触れた何かを手の中に収め、なんとか崩れてしまいうように壁に寄りかかると、男を見つめた。

見たことのない顔だった。

自分を優しく諭す父のものでもなければ、厳しい訓練を与える教官のものでもない。

敢えて言うのなら……敵、だ。

雪子の頭は混乱していた。

どうして父はこんな事をするのだ？自分をパートナーとして認めたのではなかったのか？そのために今日一日、一緒に過ごしてたのではないのか？

父ハ 自分ヲ

愛シテイタノデハ

ナカッタノカ？

父親、いや、林俊は忍ばせていたのだろう、ナイフをこちらに真

っ直ぐに向けると、無慈悲なほどの冷たい表情で雪子を見つめていた。

告白 19

「何故……？ お前と言う最高傑作を完成させるためだよ」

「最高、傑作？」

「ああ、芸術品と言っても良い。俺の生涯をかけて作り上げた、殺人のための道具だ」

「芸術品？ 道具？ 何を言っているのかわからない。まるで物を扱うかのような語り口に、雪子はさらに眉を寄せた。

鈍い痛みが体に突き刺さり、呼吸すらままならない。しかし、父であれ、殺意を持ってナイフを向けられている今、しゃがみこむわけにも行かなかった。

「なに、言ってるか、わかんないよ」

「そうだろうな。道具のお前には話した事はなかった」

俊はその秀麗な顔を歪めると、小さく息を吐いた。

「なあ、雪子。父さんを失望させないでくれ」

『父さん』その言葉に一切の体温はこもっていない。単なる記号、単なる立場、そんな乾いた感触に、雪子は自らの心が萎えていくのを感じていた。

「どういう、事が、わからないよ」

「理由を知る必要があるのは、その理由を理解できる人間だけだ。

そして、それが出来るのか、今、試しているんだ」

「何の、為に？ 父さんの国の為に？」

「いいや」

俊はゆっくりと首を横に振った。

それまでガラス玉のように何の表情もなかった瞳に、夕闇の様な陰りがよぎる。

「正直、国なんて、どうでも良くなっていたんだ。日本は好きになれなくても、俺は、ここでの暮らしを愛し始めていた」

罪悪感なのか、懺悔なのか……深い苦みを滲ませる声であると同

時に、すでにその事への迷いはふっ切ったという開き直りも感じさせる声色だった。

「ここで、お前の母親と幸せに暮らせるのなら、もう、どうでもいいような気がしていた。だって、当然だろう？ 亡くなった祖国に何故義理立てしないといけない？ 家族も、俺の人生も、何もかもを守れやしなかった国に、何の恩もありはしないんだ。そんなちゃんけな国の為に、一度手に入れたここでの暮らしを捨てるなんて馬鹿げてる。馬鹿げてるだろ！」

「父さ……ん」

それは、今までの抑圧を一気に噴出させた告白だった。

偽りの人生を生きて来た男の、偽りのない言葉だ。

「確かに、祖国を失った時は悔しかった。けどな、俺はやり直せるところだったんだ。この国で、新しい故郷、新しい家族を作り、俺にだって幸せが来るんじゃないかって」

俊が一步步、黒豹が獲物ににじり寄るようなしなやかで隙のない動きで、雪子に歩み寄る。

「けどな、それを、この国が！ この国の人間が、踏みにじりやがった！」

押し殺した咆哮には、恨みと憎しみが熱となってまとわりついていた。

そのねっとり渦巻く感情が、そのままそっくり全て自分に向けられているのを感じ、雪子は恐怖に立ちすくんだ。

男は奥歯を噛みしめると、じっと彼女を睨みその声で、彼女に告げる。

彼女の生まれて来た意味であり、業の烙印を彼女の身に刻み込むために。

「お前の母親は、日本人とお前に殺されたんだ」

「え」

見開いた雪子の眼には、哀しみを怒りに塗り込めた俊の顔が映っていた。

静かな憎しみは澱となり、俊の心に何年も積み重なり、それは熟し、今や抑えきれないほどの深みと毒をもつて彼の中を流れている。雪子には、それが見て取れるような気がした。それほどまでに、父の目は声は切実に雪子の心に迫って来ていた。

「母親は、お前を産んだすぐ後に死んだ。お前の命と引き換えに、だ」

「だから、だから、父さんは私を？」

雪子の声は小さく震えていた。それは恐怖にではなく、絶望的なまでの哀しみにだ。

ずっと、父は、林俊は自分を愛しているのだと思っていた。母親ではなく、他の誰でもなく、自分だけを。

ただ、父に応えたかった。

ただ、父に認められたかった。

ただ、父に喜んでもらいたかった。

ただ、愛されたかった。

だから、ここまで来たというのに。父は、愛するどころか自分を……。

「憎んで、殺そうとしているの？」

その言葉は自分の声の音をしていたが、どの痛みよりも痛烈に身を貫いた。

どこかで否定の言葉を待つ雪子の目は、涙に溢れ、救いを求める亡者のように俊にすがりついた。

俊はふつと微笑みを浮かべると首を横に振る。

その僅かな仕草に雪子の心に光が差しかけるが、それを次の瞬間、俊は一縷の望みに手を伸ばす彼女の手を叩き落とす。

「仕上げているんだ。未熟な体で生まれたお前何か、殺そうと思えばいつでもできた。それをしなかったのは……」

雪子の目の前で歩みを止め、右の手がナイフをその白い首筋にそつとあてた。

「お前にその日本人を殺させるためだよ。その為に、殺人のプロとなるように育て上げた」

左の手が、雪子の髪を優しく撫でる。

「雪子、俺の為なら、何でもできるかい？」

そう、そのために自分は生きて来た。

雪子は言葉なく頷く。

今、こんな状況にあっても、やはり心が求めるのは目の前の自分にナイフを突き付けている男の愛情なのだ。

その男は、まるでとくにそんな雪子の想いを見透かしているかのような目で、彼女を覗き込み、そして彼女自身にそれを自覚させるためかのように、さらに踏み込み、静かに問うた。

「命を、賭ける事も？」
と。

告白 20

そんなの、容易い。雪子は細かく長い睫毛を震わせる。
もし、それで

「父さんが、愛してくれるのなら」

「良い子だ」

俊は嬉しげに表情を崩すと、ぐいっとさらに刃を彼女の首、頸動脈の上に正確に押し当てた。

「なら、俺を殺しなさい。俺を殺せるほど、成長したのだと、俺に示してくれ」

「それが。父さんの……望み？」

もう、雪子の目に涙は浮かんではいなかった。

ただ、煩わしいほどに鳴りやまない鼓動と、自分の生を告げる痛みに唇を噛み、俊を見つめる。

俊が、ゆっくり頷いた。

「ああ、俺の望みだ。そして、それは、お前にしか叶えられない」

どうか愛してください

どうか私を見てください

どうか、どうか、どうか……その手を……。

雪子は顎を引くと腕を伸ばし、男の首にそれを回した。

ゆっくりと引き寄せる。大好きな瞳がすぐそこにあった。

それは今、自分のみで満たされている。

彼の世界には、今、この瞬間は自分しかない。

雪子は目を伏せると、そっと唇を重ねた。

死者と交わすような口づけを、雪子は自分の一番深い部分に刻み込む。

父を、林俊を自分は愛している。
愛しているから……。

雪子は、ゆっくりと花びらがその茎から枯れ落ちるように離れる
と、男の胸を軽く押した。

瞳が混じり合う。

父が微笑んだ

雪子も微笑んだ

そして幼いその手の中の引き金が、引かれた。

人間は簡単には死なない。

それは雪子が常々言われている事だった。

だから、初めの一撃が聞いたとしても、すぐに次、また次、相手
の息の根を止めるまで油断してはならないと。

雪子が俊に飛ばされた先で掴んだサイレンサー付きの銃が貫いた
のは、俊の肝臓と左胸肺の辺りだった。

出血はおびただしく、しばらく片肺ではままならない呼吸に俊の
顔はすぐに青ざめた。

俊は、父はもうすぐ死ぬ。

雪子はそれを悟ると、子どもから悪戯の道具を取り上げるような
手つきで、彼からナイフを奪い、体で崩れる彼の体を受け止めた。

二人は崩れるように座り込む。

温かった。

感じる彼の重みも、血の生臭さも、乱れた呼吸も、皆、温かかつ
た。

雪子は手にある銃とナイフを遠くに放り投げると、改めてその愛
しい体を抱きしめた。

俊が、なぜとどめを刺さないのか、聞いたそうな目を向けていた。
いや、実際問うていたのかもしれないが、雪子の耳に届くような言
葉にはなっておらず、呻き声と死期に近い者特有の、ひゅうひゅう
とした妙に乾いた音を喉から漏らしているだけだった。

雪子は足を投げ出すと、彼の頭をそこに置き、ゆっくりと眺めながらその額にかかった前髪を撫で上げた。

愛しさは今にも溢れ出そうなのに、頬に伝うのは冷たい涙だけだった。

「お父さん。これで、私の事、愛してくれるよね？」

雪子は涙に濡れた声でそう囁くように訊いた。

自分の中で途切れていくその命、その命が消える前に、どうか、お願い。一言でいい。たった、一言でいいから口にしてほしい。

もう、娘としても構わないだから、どうか、自分を……。

俊の目が優しく微笑んだ。

力のない手が、雪子の頬を撫でる。

『泣くな』

それは彼の故郷の言葉だった。

『泣くな。俺は、嬉しいんだ』

途切れ途切れのか細い声に、もう、気は見当たらない。それでも、雪子是一言も聞き逃すまいと耳を澄ませ、その手を握った。

『愛してたよ』

「とうさん！」

『』

それは、雪子の知らない言葉だった。

日本語でも、英語でも、フランス語でも、中国語でも、アラビア語でも父の祖国の言葉でもない。

生まれて初めて耳にする単語。

しかし、雪子にはわかった、父が最期に口にした言葉、それは…

…。

告白 21

父の手からスルリ、力が抜け、花がしおれるようにその手が垂れ落ちた。

雪子は微笑みに虚空を見つめた魂の抜け殻を凝視した。

怒りと憎しみと悲しみとやるせなさ、腹の底からこみ上げ、雪子は思いつき唇を噛んだ。

やがて、そこからは血が滲み、俊の頬の上に、一滴落ちた。まるで、涙のように見えた。

父が、最期に口にした言葉。

それは、

妻の名だった。

確証はどこにもない。証拠もどこにも存在しない。しかし、雪子にはわかった、父は命が尽きるその時まで、雪子を見て何かいなかった。ずっと、ずっと、彼は、雪子の中の妻を見つめ、愛し、そしてその命を奪った娘を憎んでいたのだ。

夜が更け、再び朝が来る。

時計が、甘いメロディーを再び奏でた時、部屋に入ってきたのは、その後の雪子の後見人となる晴美だった。

晴美は雪子を見つけると、全てを把握した、頷いた。

そして、一気にカーテンを引き、外の光をその闇の中に溢れさせた。

雪子は眩しくて目を細めた。

そこに広がっていたのは、哀しいくらい綺麗で澄み渡った青空だった。

「その仕掛け時計のオルゴールを聴きながら、私、ようやくわかったの。父がどうしても、私を愛してくれないのか。どうしたら、愛されるのか」

「雪子？」

雪子は顔をあげ、今度は自ら立ち上がった。

それは凜とした百合の花のように毅然としていて、美しい。そして、その花弁が一気に開いたような華やかさで、雪子が微笑んだ。

「父の望みを叶えればいいのよ」

そうして、雪子は東吾の手をとり、正面から見つめた。まるで誓いの後の指輪の交換のように手を取り合い、見つめあう。

その彼女の瞳に、もう、憂いの色はなかった。

「望みって、叶えたんじゃない」

「いいえ。まだよ。父は私に言ったわ。父を殺せるほどに成長し、そして私の手で母を殺した日本人を殺せと。つまり、私はまだ、父の望みを叶えたわけではなかったの。そして、この日をようやく迎える事が出来たのよ」

その声には一種の熱っぽさを感じたが、東吾は戸惑った。雪子の目的。それは父に愛される為に、母を殺した日本人を殺すこと。

と、言う事は

「この神父が犯人なのか？」

この、人の良さそうな神父が殺人？ 神に仕える聖職者が！？

東吾は信じられない思いで死体の方を振り返った。

「あれ？」

彼は自分の目を疑った。そして言葉を無くし、その光景を見つめ

る。

柔らかな日が降り注ぐ十字架の下。

そこに命尽きた肉の塊はなく、血だまりだけが揺れていた。

「時間だよ。雪姉さん」

啞然とする東吾は笑いを含ませた風香の方を振り返り、思わず声を上げた。なんと、そこには、あの神父が立っているではないか。

「どういう」

あの特徴的な耳は、やはりあの神父だ。黒いその服にはべったりと血液の後はあるが、その顔には血色が戻り、にこやかにこちらを眺めている。

どうして？何が起きている？あの時、神父は確かに死んでいた。触れたわけじゃないが、胸は上下していなかったし、見開かれた目は瞬き一つしていなかった。なのに。

東吾は俄かに理解できずにただただ口を何度か開閉して、神父を見つめるだけだ。

晴美がそんな東吾を気の毒に思ったのか、苦笑に口元を緩め首を少し傾げ東吾を見つめた。

「東吾さん。これはね、貴方のための贖罪の場だったのよ」

「は？俺、の？」

「そう。始めに言ったでしょ？東吾さん」

雪子の声に東吾は振り返った。雪子の笑みは一層輝きを増し、神々しいばかりのそれは、教会に差し込むその陽光のように東吾に降り注がれる。

「私は、今日、この日の為に貴方に出会ったって」

「は？」

確かに、そう言った。だが、それは、一体？

「察しの悪い男だね。まったく」

風香の人をあからさまに馬鹿にした声が投げられた。東吾は思わずむっとなりその小生意気な女子高生を睨みつける。

しかし、風香は臆することなくそれを正面から睨み返すと、口の

端に人の悪い笑みを浮かべた。

「説明するのもウザいよ。全く、能天気というか、大バカモノって言うか。あんたがこうやってここにいるのに、罪の意識は全くないんだね。って事は、裁きはあれだ。もう、決まりだ。残念。雪姉さんの優しいヒントにも、自分の罪を顧みる事が出来ないなんて、アンタ、そうとうの悪党だよ」

「何の事だよ！」

周囲の空気が、引き締まり、東吾を包囲し今や締めあげよとしているのが感じられた。生意気な舌を動かす風香にしろ、生き返った神父にしろ、困ったような微笑みを讃える晴美しろ、無表情で沈黙したままの氷雨にしろ、誰一人として東吾に味方するものはいないように感じられた。

「神父。裁きは決まってるよね？」

神父は静かに頷き、自分の手をその胸元の辺りまで掲げ皆に見せた。

「死者を暴騰した時から」

「あ」

東吾は声を上げる。確かに、自分は神父の死体の手を踏みつけた。だが、しかし、それは……。

「なんだよ。アンタ、死んでたじゃないか。こんな場所で死体のふりして人をだますのと、人の手を踏むのとそんなに差はあるのかよ。それに、何だ？俺に罪？何言ってるんだよ。死体の手を踏んだのが罪なのか？裁き？何の事だよ？全くわかんねえ！」

東吾の叫びは虚しく教会に響いた。不愉快を通り越して、東吾は息を詰まらせるようなにじり寄る脅威を感じ不安になっていた。

うつすらと漂う、突き放すようできて攻撃的な空気は全て自分に向けられている。しかし、その理由が不明だし、彼らが何を意図しているのかも明瞭ではなく、まるで擦りガラスを通した景色を眺めているようだ。

「東吾さん」

その時、背後で雪子の声がした。

ピアノの鍵盤をポンと弾いたような澄んだその音色に、東吾は思わず笑みをこぼして振り返る。

「なあ、雪子、どういう事だよ。何かの冗談か？確かに、俺はこれまでそんなにいい人間じゃなかった、あのオッサンの手も踏んだ。だからって、こんなに皆に責められないといけないほどじゃないだろ？別に、人を殺したわけでもない……」

「本当に、そう思ってるの？」

「え？」

雪子は目を細めると、憐れみに泣き笑いの顔をし東吾のその頬を撫でた。

「貴方は、キーワードでものを考えるのが好きだったわね。じゃ、私が最後のキーワードをあげる」

「雪子？」

「初めて、呻き声、母の死、この日のための出会い」

初めて、呻き声？はつと東吾は息を飲んだ。

そして、雪子を凝視する。

雪子は嬉しげに頷いた。

ようやく、真実に辿りついてくれたのね、そう言わんばかりのその顔は晴れ晴れとしていて、どんな誤魔化しも情けも含まない潔癖さを備えていた。

「もしかして……俺が、ガキの時に」

初めての女を思い出す。事の後に蹲り呻いていた女。あれは、もしかして雪子の母親だったのか？あの時、妊娠していたが自分の暴力で、体に異常をきたした。

それで……。

東吾はあの時の女の目を思い出す。

- 許さない

それは、目の前の雪子のそれと重なり、言葉は完全に沈黙した。

「そうよ。東吾さん。私は、貴方をずっと探していた。でも、神父に諭されたのよ。どんな罪にも一度は赦される機会を与えねばならない。そうしなければ、神の代わりに裁きを下す事にはならない」

何かが光った。

東吾は眩しくて目を細めた。

「神の裁き何かって思ったけど、天国に行けなくなって父さんに会えなくなるのは嫌だから……」

花嫁はそういうと、東吾を包みこむように抱きしめた。

「罪は、罪を罪とも思えないアナタの心ね。赦しのしようがないわ」

「雪子？」

「さつき、東吾さん、言ってくれたわね。私の為に命をかけられるって」

耳元で囁く声は、問いではなく確認だ。東吾は身を強張らせ、慌てて彼女の体を引き剥がそうとした。しかし、驚くほど雪子の体はぴくりとも動かない。まるで鋼の塊のように強固に東吾に抱きついてる。

「ゆ、雪子!？」

恐怖が喉元までせり上がって来た。

しかし、花嫁はもう、その笑顔を見せない。

「神父。裁きを」

雪子の声が響いた。神父は残念そうに眉を下げ、首を横に振った。

「雪子？」

「東吾さん、私の望みを叶えて、せめて最期、その口が語った言葉にウソはないと神に証明して。そうすれば、もしかしたら……」

雪子は体を離すと、東吾の瞳を覗き込んだ。

嘘だと言っただけだった。この期に及んでも、これは冗談だとか誰かが笑い飛ばしてくれるんじゃないかと思っていた。

告白 23

だって、そうだ。こんな話し、現実にあるわけない。女に悪戯して死刑になる人間なんていないんだ。

雪子の母親は運が悪かったのだ。そして、むしろそんな女に当たってしまった自分の方が被害者だ。

神？ 馬鹿馬鹿しい。

東吾はじつと雪子の目を見つめる。

美しい雪子、優しい雪子、可哀そうな、雪子。

でも、女はいくらでもいる。

今聞いた話が全て事実だとしても、自分は殺されてやる気は全くしない。

こんな戯言、たくさんだ。

「雪子」

東吾は反省に色を失くした、ふりをした。そして雪子のその冷たい頬に手をあてると、彼女の手にも光るナイフに一瞬目をやった。

殺し屋？ とはいっても、所詮女だろ。

東吾は口元に笑みを浮かべると

「すまなかった」

自分の手を差し出し、そのナイフに伸ばした。雪子の身が一步引かれる。彼女の手を掴んだ。奪えない気はしなかった。

すまない。雪子。

お前を愛してはいるが、それ以上に、俺は俺自身を……。

その時だった。背中に軽い衝撃を感じたのは。

すぐに熱と痛みがそれを追いかけて、東吾は目を見開き動きを止めた。

「え……」

そつと後ろに振り返る。

一瞬毎にこれまで感じた事のない痛みが、じわりじわりと増して

いる。苦悶に顔を歪め、息を飲み、ようやく目の端に確認したのは、自身の背を鞘に深々と納まっているナイフだった

「晴美さん」

「雪子さんは、まだまだ人の心が見えてないのね」

晴美の子どもをいなすような声がした。東吾は崩れ落ちながら、女たちの顔を交互に見る。

「どうやら、東吾の背にナイフを投げたのは晴美のようだ。」

「晴美さんのような力は、私にはないですよ」

雪子の拗ねたような声が頭上でした。体が、床を感じ頼にそれがあたる。背から、痛みとともに温かなものが迸り出ていくのを感じる。

「私が『見る』事が出来るのは、『今』だけよ。氷雨さんのように過去まではわからない」

自分の命が、体から漏れ出し周囲に広がっていく。それは、罪を背負わすように鈍い重みを伴いながら自分を覆い始める。

「ね、この男、能力者って事ないよね？ 空知神父みたいにさ」

「一時間、死んでいられるこの力を他に持つ人間がいるとは、聞いたことありませんね」

「そうそう。もう、雪姉さんの話があんまりにまだるっこしいから、懺悔の一時間が過ぎるんじゃないかってヒヤヒヤしたよ。空知神父が復活する、それまでに悔い改めたら救うって事になってたでしょ？ ま、私はそんな必要ないと思ってたけどね。だって、この男、そんなたまじやないじゃん。雪姉がどうしても自分の過去整理をいつもの形でしたいからって付き合ってたけどさ。ってか、雪姉の能力ってなに？ 氷雨姉さんみたいに、まさか他人の過去を覗き見る能力じゃないでしょ？」

「のぞき見なんて言うな。人聞きの悪い」

「そうよ。おかげでこの男を探し出すことができたんだから」

「はいはい。どうせ、私には特別な能力はないですよ」

「すねないの」

「そうですね、誰もが特別、唯一の存在なのです。だからこそ、命はかけがえのないもので……」

「あゝ、説教はいいよ。あたし、しゃべるのは好きだけど、人の話聞くのは苦手なんだ。だいたい、どうして坊主ってみんなそうお喋りなわけ？ あ、そうだ、しゃべるのが仕事なら、私、向いてるかも！」

「風香には絶対向いてない」

頭上で軽口が楽しげに飛び交っていた。

東吾は遠のく意識の中で舌打ちをした。

教会、死体、花嫁、ナイフ

全ては、自分の為だったのか。

全てはもう、ずっと前から……。

雪子

何が悪かったんだ

俺は

殺されるほどのこと

したのか？

俺は

本当にやり直せると

思ってたのに

君と

君と

君……

判然としない気持ちの悪さを抱えながら、東吾の混濁した意識は
そこで途切れた。

雪子は男を見おろし、小さく息をついた。

力が抜け、崩れそうになるその背を支えるように、晴美が彼女の肩を抱く。

「いいの？とどめを刺さなくても。それが、アナタの望みだったのでしょうか？」

「ええ」

雪子は頷いた。足元の男は意識は失ったようだが、体はまだ弱々しくも呼吸を繰り返している。

「晴美さん。今、まだこの男の心、見えますか？」

晴美は首を横に振った。意識を失った相手の心の内まではさすがに読み取れない。しかし、雪子の聞きたい事はわかった。

「この男は、最後まで罪を認識できてはいなかったわ」

雪子の顔が苦しみに歪んだ。ナイフを持つ手が震えていた。酷く虚しい気持ちがそうさせているようだった。自分にもそんな感情の理由が分からない。

そして、そつと目を閉じた。

静かに自分の中の林雪子という人物と対話する。

何を悔やんでいたのか、何をしたかったのか、どうすれば救われるのか。

耳には耳鳴りの様な沈黙と、男のススキの穂がすれあうような呼吸しか聞こえない。

命の、尽きる瞬間は、どの人間にも等しく訪れる。それは、どんな理由でどんな経緯があり、その人間にどんな価値があるうと、関係ない。

林俊の死も、その妻の死も、妻を殺した者達の死すらも、皆、同じなのだ。

雪子はそつと目を開けた。ようやく、自分が選ぶ道を定めたのだ。

ナイフを背に突き立てたままの男の背に、自身のナイフを添わせるように置くと、立ちあがり神父の方を見つめた。

晴美も風香も氷雨も、彼女が何故、とどめを刺し、自分の願いをかなえようとしないのか不思議そうに見守っている。

しかし、雪子はその視線の中を軽いカーテンをくぐるように進み、指を組み祈るような姿勢で空知神父の前に傳いた。

「神父。私のやるべき事が、ようやくわかりました」

「聞かせてください」

厚みのある声は包容力をもって雪子に振りかかった。雪子は目を上げ

「罪を、自分の罪を認め償います」

「はあ？」

声を上げたのは風香だった。すぐに何かを言おうと口を開いたが氷雨が「黙つときな、新人」と素早く片手で彼女の口を塞いだ。

「神は、あなたの勇気を歓迎するでしょう。来なさい」

「はい」

雪子は立ち上がると差し出された神父の両手に自身の手を載せた。軽く握られた空知神父の手のぬくもりに、雪子の心が柔らかく解けていく。

それは、一見、花嫁が神聖な誓いを立てるかのようにも見えた。

「貴女の告白は全て聞き届けました。安心して、生まれ変わらなさい」

「はい」

雪子の顔が一層輝いた。

それは、傍から見ている風香でさえ溜息をもらすほど美しく、清らかな花嫁の笑顔だった。

東吾の死体の処理は自分の仕事だから、と残った氷雨を置いて、三人は教会を後にした。

血に染まったウェディングドレスを脱いだ雪子は、先ほどとはまるでイメージの違う、スキニーなデニムにハイネックの半そでのセーター。その上にジャケットと言う姿になっていた。

後ろ手に一つくりにした長い黒髪は、黒豹の尾を思わせるほどしなやかで、そこに伸びる長く白い首に沿って揺れるのが何とも色があった。

「あー疲れたっ！やっぱ、一仕事終わると、どっと疲れが来るわね」

雪子が大きな声を出し、両手を繋いで天を押し上げるような恰好でそう言った。それは清々しさを通り越し、まるで今までの事全てがなかったかのような体だ。

風香はさっきの彼女とのギャップに閉口した。

風香はこの組織のメンバーに入ってまだ3ヶ月ほどだ。仕事と言う仕事はしていない、未だ身元調査をされているトライアルで、彼女達の仕事を見たのはこれが初めてなのだが、実際、雪子という女性に会ったのは、今日を含め片手で余るほどだった。

うち、一度はさっきお陀仏した東吾と一緒にだった。ま、この場合、教会で死んだのだから仏と言うのは少々おかしいのかもしれないが。

風香が今、身を置くこの組織は、弱い者の無念を晴らす世直しの様な仕事をしている連中と認識していた。

空知神父をリーダーに、人の心が読める晴美さん、死体処理が得意で過去が見える氷雨、そしてこの雪子が主なメンバーだ。それぞれ、特殊な力を持ち、人の魂を救うのだ。

その方法は、大抵、氷雨と晴美がその罪人を見つけ出し、雪子が償うチャンスを与え、神父が裁きを下す。

罪人が自らの罪を認めその口で告白し懺悔すれば、裁きは保留。そうでない場合は、東吾の様な事になる。

聞いただけでは馬鹿げている話だが、風香は実際に彼女達に救われた。それで彼女達の仲間になろうと決めたのだが。

しかし、それにしたって……。

風香は、ものすごい勢いで晴美とこれからどこに打ち上げに行くかを相談している雪子の横顔を見た。

彼女の能力は何なのだろう？

図らずも、今のは仕事ではなく、雪子の過去の清算だと聞かされていた。でも、この気持ちの切り替えようはあまりにも不自然だ。かといって、強がっているようにも見えない。

「あの」

風香は堪らず口を挟んだ。ピタリ、雪子と晴美の会話が止まり、6つの目が風香を見つめる。

「結局、雪姉の能力って言うか、役割って何なんですか？　ってか、どうして雪姉、そんなに元気ハツラツっていうか、平気な顔をしているんですか？　少なくとも、聞いた話じゃ……」

その瞬間、わっと噴水が吹きあがったように笑いが溢れだした。

風香は意味が分からず大笑いする二人を見つめる。一人、苦笑していた空知神父が風香をホローするように言葉を挟んだ。

「ああ。風香さんはまだ知らないんですね。雪子さんの能力」

「だから、さつきからそう言ってるじゃん」

思いつきり馬鹿にされたような笑いに気分を悪くし、風香は口を尖らせる。

空知神父は彼女のそんなあどけない仕草に苦笑すると、まるで迷子に道を教えるような口調で、こう告げた。

「雪子さんの能力は、物を言えない人の代理ですよ」

「は？」

意味が分からない。風香は目を丸めこの時ばかりは舌が回らず雪子の方を凝視した。雪子は笑いに涙を浮かべ呼吸を整えながら風香の方を見ると、

「平たく言つと、イタコよ」

と言った。何をどう平たく言えばそうなるのかわからないが、風香にもその意味はわかった。つまり、雪子は……。

「死んだ人の代弁なの。さっきの話の女の子は……」

ふと、それまで緩んでいた表情が引き締まり、雪子の目に寂しげな風が吹いた。

「父親を殺した時、死んだの」

「雪子さん」

神父は雪子の肩に手を置くと、首を横に振った。それ以上語るなと言う事だろう。雪子の隣にいた晴美はそれを察し、彼女の背を軽く押し、風香と神父を置いて先に行ってしまった。

風香はそんな背を釈然としない思いで見つめる。

仮に、そういう能力の持ち主だとしても、おかしくないか？ だって、はじめ、雪子はこれは自分の過去の清算だと言ったじゃないか。

「空知神父」

風香は口を尖らせたまま神父を見上げた。初老の神父は小さく微笑み

「林雪子の亡霊を、彼女は浄化させたかったんですよ」

そう言った。風香にはその意味が良くは分からなかった。が、前に行く二人の会話から『焼き肉』の単語はよく聞き取れた。

風香はまあ、いいや、と、もやもやする思考を振り払うと、二人に置いてかれないように走りだした。

神父が後ろで困った顔をして自分を見ているのはわかったが、考えるのはもともと得意じゃないのだ。

「ねえ、雪姉。その焼き肉の店……」

風香が彼女の袖をひっぱった。

その拍子に僅かにジャケットが肩から落ち、雪子の腕が露わになった。そして、そこにあったのは、一筋の弾痕の痕。

「え」

風香は立ち止まり、息をのむ。

この傷は？ もしかしてさっきの話の中の傷なんじゃないのか？
ってことは、やっぱり？

「ねえ！ さっきの話、死人の代弁なんかじゃないんじゃないの？ さっきのはやっぱり……」

雪子が目を細めた。ジャケットを羽織りなおし、その細く長い指をそつと風香の唇におし当てると

「今日の私はね。もう嘘しかつけないから」

といって片目を瞑った。

嘘しかつけない？

と言う事は、この言葉が嘘。つまり本当のことしか言えないって事になる。ならば。嘘しかつかないというのは本場で、それは嘘で……。

風香は頭がこんがらがり閉口した。雪子と晴美はしてやったりと顔を見合わせ笑っていた。

穏やかな日差しの中、その笑い声は高らかに響く。

空知神父は、生まれて来たその業から逃げないと決めた少女の告白が、そのままこの透明な空に溶けていけばいいなど、思った。

そして、祈る。

願わくば、人の想いを代弁し救う事で、彼女自身の心も救われ、いつか涙を封じるための笑顔という嘘も、告白できる日が来ますように……と。

告白 24（後書き）

はじめまして。

小説もどきを書きはじめ約1年。こちらでのサイトでは初投稿になります。いかがでしたでしょうか？

このお話は今後『告白シリーズ』として続けていく予定です。もし、よろしかったら心の端にでも止めていて下さったら嬉しいです。（続編「ある少年の告白」は明日より投稿します）

最後になりましたが、私の拙い文章をここまで読んで下さり、本当にありがとうございます。

心よりの感謝をアナタへ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4688g/>

ある花嫁の告白

2010年10月8日14時44分発行